

杉本元信教授送別の辞

島田 長人

東邦大学医学部総合診療・救急医学講座
東邦大学医療センター大森病院教育企画管理部教授

杉本元信教授は、1972年に東邦大学医学部をご卒業され、東北大学抗酸菌病研究所、仙台厚生病院に1年間ご勤務され、1973年に当時の東邦大学医学部内科学第2講座に入局されました。1979年には、ボリビア共和国ラパス消化器センターでJICA派遣医としてご活躍されました。1982年に、米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)肝臓研究室に留学され、カプロヴィッツ教授のもとでグルタチオンS-トランスフェラーゼ(GST)の研究に従事し、多くの業績を上げられました。帰国後も臨床と研究に邁進され、新進気鋭な杉本先生の研究グループには若手の先生方が続々と加わってきました。実は、私の兄も杉本先生の門下生で、臨床はもちろんのこと研究面でも大変お世話になりました。当時は、研究仲間だけでの温泉旅行があったようで、非常に和気藹々で楽しい研究グループだったようです。実は、今でも当時の仲間の先生方を中心に、「杉本先生を囲む会」が毎年開催されており、私も数年前から参加させて頂いています。諸先輩の先生方の話を伺うと、杉本先生と一緒に臨床や研究に没頭していた頃の光景が、まさに青春の一コマとして蘇るようで、その一言一句がいつも言霊として響いてきます。診療や研究といった仕事をはるかに超えた人と人との深い心のふれあいがあったのだと思います。

その後、大森病院では診療科の再編成が行われ、2002年に総合診療・急病科学講座(現在の総合診療・救急医学講座)が新設され、杉本先生が初代教授に就任されました。旧第1、第2内科の出身医によって運営され、2003年には外科からも出身医が加わり、内科だけではなく外科をも含めた総合診療の基盤ができてきました。2004年2月に私も外科診療に参加させて頂き入院・手術治療を開始しました。しかし、専門領域の治療が要求される大学病院での総合診療科の立ち位置を確立していくためには、並大抵な苦勞ではなかったと思います。医局員の努力はもちろんですが、他施設の総合診療科に見習うべく、沖縄県立中部病院

の徳田安春先生(現筑波大学教授)、順天堂大学医学部附属順天堂医院の林田康男先生や九州大学の林 純先生などの多くの先生方のご支援を頂いたのも、まさに杉本先生のご尽力の賜物でした。また、多忙な診療の間に多くの学会を主催されており、最近では、2011年9月に第3回日本病院総合診療医学会学術総会、同年10月には第42回日本消化吸収学会総会(JDDW2011)も見事に盛会裏に終わりました。一方、日々の臨床を振り返りますと、患者さんへの接し方や診察が非常に丁寧な先生でした。時々、杉本先生の患者さんを拝見させて頂く機会がありましたが、どの患者さんも杉本先生を高く信頼されていました。先生の診療を横で拝見させて頂くと、先ず印象に残ったのは、患者さんの訴えをよく聞くこと、そして今後の方針について患者さんと一緒に考える真摯な態度でした。そこにはまさに総合診療医としての姿がありました。

そして、2009年7月に東邦大学医療センター大森病院病院長に就任されました。私も杉本先生にお声掛けを頂き教育担当の副院長を務めさせて頂きました。この3年間にはさまざまな出来事がありました。まずは、日本医療機能評価機構によるVer6.0の受審です。大森病院教職員が丸となってブラッシュアップ作業を行い、本邦の大学病院の中でも上位の高得点を獲得し見事に認定を勝ち取ることができました。そして、忘れもしない2011年3月11日の東日本大震災です。救命救急センターの吉原克則先生を筆頭に、超急性期から現地へ医療チームを派遣し、災害拠点病院としての責務を十二分に果たしました。さらに、教育面ではNPO法人卒後臨床研修評価機構による外部評価を受審し、これも3病院に先駆け認定を頂きました。診療面では、一般・消化器外科の金子弘真教授を中心にがん診療体制の整備を行い「地域がん診療連携拠点病院」の指定を頂きました。もちろん、病院経営も一気にV字回復させ、大森病院のみならず東邦大学の基盤がさらに盤石なものになりました。2011年10月の病院ランキング(週刊ダイヤモンド、

ダイヤモンド社，東京，2011)では，大森病院は東京都で第3位，東日本全体で第4位の成績でした。たかが雑誌のランキングですが，これも立派な第三者による外部評価の1つです。私は，副院長という立場から，極めて多忙な病院長としての杉本先生を3年間横で眺めさせて頂きました。そこには，過去を詳細に検討し現状を細部まで把握するために常に現場に足を運び生の声を真摯に受け止めている姿がありました。

今から振り返りますと，旧第2内科時代の研究グループの長としての姿，総合診療・救急医学講座の責任者としての姿，大森病院の組織の指導者としての姿，そして一人の患者さんを前にした医師としての姿にはすべて共通していることがありました。1つは，診療科の仲間や現場の病院職員そして患者さんのもとに自ら歩み出て相手の話をよく

聞き真摯に向き合い話し合うこと，そして2つ目は，決して相手（診療科の仲間や病院職員，患者さん）を誹謗中傷しないことでした。その結果として，診療科では日常の診療や研究，病院ではさまざまな現場職員の仕事へのモチベーションが高くなり，患者さんにおいては治療への意欲が湧いてくるのだと思いました。杉本先生から教わった人としてのあるべき姿は，医療においてはまさに「総合診療の心」だと感じています。今，この心は瓜田純久教授に見事に引き継がれました。医局員一同，気持ちを新たに引き締め一丸となって，杉本元信教授から教わったこの「総合診療の心」をこれからも連綿と引き継いでいきたいと思えます。永きに亘り本当にありがとうございました。ご健康に留意され，今後もますます熱いご指導を頂きたいと皆で願っています。